『扁鵲倉公伝彙攷』の諸本について

成　　高　雅

『史記』扁鵲倉公列伝は、中国初の正史『史記』（前 90 頃）列伝四十五番目「扁鵲倉公列伝」にある扁鵲と倉公という著名な医者の伝記である。扁鵲は伝説的名医であるが、その生没年の記載からして数人を複合したものと見られるが、この記述から当時の医療状況や医師の理想像がうかがえる。倉公は淳于意という前漢の医者で、倉公伝には孝文帝の十三年（前 167）に手記したとされる二十五種の医案（カルテ）が掲載されており、具体的な医療の一端を示す最古のものとしてつとに注目されている [(1)]。この資料は、中国伝統医学の発展段階を知るための貴重な文献であり、日本の学者たちも多くの研究を行ってきた。宋版『史記』扁鵲倉公伝部分に書き込まれた幻雲（月舟寿桂、1460～1533）の注記をはじめ、浅井図南（1706～1782）の『扁鵲倉公列伝割解』（1770 年刊）、多紀元簡著・多紀元胤補・多紀元堅校訂による『扁鵲倉公伝彙攷』（1849 年刊）、山田業広（1808～1881）『扁鵲倉公列伝集解』（1869 年自序）などの記載・著書が存在している。また、扁鵲伝の注解書には他に村井琴山『扁鵲伝考』（1777 年成）、中茎暘谷『扁鵲伝正解』（1823 年刊）、石坂宗哲『扁鵲伝解』（1832 年石坂宗圭序）、伊藤鳳山『扁鵲伝問難』（1850 年成）などがある [(2)]。

本稿では、それら『史記』扁鵲倉公列伝に関する研究書の中で、『扁鵲倉公伝彙攷』という多紀元簡（1755～1810）が文化七年（1810）に著し、その子の多紀元胤（1789～1827）が補遺し、元胤の弟の多紀元堅（1795～1857）がさらに増補・校訂し、嘉永二年（1849）に刊行した『史記』扁鵲倉公列伝の注解書を取り上げて検討したい。

『扁鵲倉公伝彙攷』を編纂した多紀家の元簡・元胤・元堅は、江戸時代後期の医学考証学派の代表とされる学者である [(3)]。医学考証学派とは、中国の清朝で盛んだった考証学という実証的・文献学的な学問を医学分野の古典において研究・論証し、文献学を中心として医書を校刻するなど、書誌学上に大きな業績を残した学派である。多紀元簡・元胤・元堅による『扁鵲倉公伝彙攷』は、古今の文献を渉猟し、海保元備などの考証も取り込んで作成された著述で、同列伝の研究書としてはもっとも高水準のものと評価されている [(4)]。本書は包括的に多紀家の研究手法をまとめた考証的著作で、当時の清朝の学術の展開との関係性を考える上で、医学考証学派の学術、或いは江戸時代学術界の清学受容を探求するために貴重な資料と言えよう。

本書に関して、小曽戸洋は「多紀元堅自筆校訂の『扁鵲倉公伝彙攷』」で、多紀元堅自筆稿本に

ついて紹介している[5]。宮川浩也は「『史記会注考証』と『扁鵲倉公伝彙攷』の関係」で、『史記会注考証』が相当程度『扁鵲倉公伝彙攷』に依拠して成立したことを論じている[6]。さらに、宮川は「『扁鵲倉公列伝割解』の研究」で、浅井図南『扁鵲倉公列伝割解』の諸本を検討するに当たって、『扁鵲倉公伝彙攷』との関連について多く論じている[7]。楊海崢は「日本『史記』研究論稿」の「『扁鵲倉公列伝』研究」の一節で、日本で行われた『扁鵲倉公列伝』の研究をまとめて、その中に『扁鵲倉公伝彙攷』は医学考証学派の代表研究として、整理及び考証が高い学術価値を持っているとしている[8]。これらは重要な成果であるが、『扁鵲倉公伝彙攷』に対する専門的な考察は未だなされていない。

『扁鵲倉公伝彙攷』を研究するために、その成立過程及び現存する諸本、特に編纂における稿本の伝存状況及び諸本の関係を考察する必要がある。本稿は、まず『扁鵲倉公伝彙攷』の成立を概略する。次に、本書の編纂過程における各自筆稿本を調査・整理し、諸稿本の関係、もしくは本書の編纂過程を究明する。最後に、本書の刊・写本の伝存状況と伝存本について検討する。

一、『扁鵲倉公伝彙攷』の成立

前文で述べたように、『扁鵲倉公伝彙攷』は、多紀元簡が最初に著し、その二子元胤・元堅の増補が加えられ、嘉永二年（1849）に定本が刊行された。刊本は上・下二巻あり、具体的書誌情報については後述する。その冒頭では、著述情報を、

丹波元簡廉夫　著
　男元胤紹翁　補
　　元堅亦柔　附桉

と記している。本文は、扁倉伝の原文に続けて注解を附す形式をとっている。最初に元簡の注があり、「補」の四角囲みに続けて元胤の注、「附」の四角囲みに続けて元堅の注が記されている。こうして三人の注記が分けられており、彼らが引用した資料や行った考証も明瞭である。

この本の編纂過程は、刊本の元簡と元堅による序跋文からも窺える。

元簡序（寛政癸丑）
扁鵲倉公，太史所傳，古奥結轖，不可解者多矣。予有匯考，原書于評林本上下方及行欵間。今茲説二傳于醫學，同人舉請貸借，然以其細字難辨，遂仿義門何氏讀書之記，另抄成一書。當與索隱正義，及滕氏割解參看。淺狹庸瑣，雖未能啓發幽旨，於稽考之際，或少有所得雲。癸丑小春之望，櫟蔭精舍書。元簡
（大略：扁鵲と倉公は、司馬遷が著した伝記にあり、難解な部分が多い。私がそれを考証し、最初は評林本『史記』の欄外に書き記した。医学館で扁鵲伝と倉公伝の講義をしたところ、考

証した内容がよく参考に借用されたが、小さい字が読みづらいので、何焯『義門読書記』を模倣して別の本として抄出した。本書は『史記』索隠・正義及び浅井図南『扁鵲倉公列伝割解』を参照して読むべきである。本書の内容は浅はかで扁鵲倉公伝の真意を明らかにしていないが、少し考証の参考にはなろう。）

元簡後書（文化庚午）

餘今年三十九，適與倉公召問之年均矣。奈何質性拙鈍，學弗增進，術弗加精，雖古今人固不相及。至講是傳，無乃慚乎。懷乎哉。書已成，慨歎之餘，聊記於其末。腊月念二日。簡書

文化庚午歳八月重訂簡記

（大略：私は今年三十九歳で、ちょうど倉公が文帝に召し出された年と同じである。しかし私の素質が愚鈍であり、専門にも不学で、倉公伝を講義することは慚愧に堪えない。本書を著して感嘆してやまず、最後に記した。）

元堅跋（嘉永已酉）

仲景而上，其宜以羽翼素靈難經者，特有扁鵲倉公二傳耳。扁鵲傳，唯趙簡子一段，稍涉荒唐，其他則論理精邃。自非神醫，不能言也。倉公傳，皆自撰對問之語，旨趣幽眇，與軒岐出入。但脈法是或一道者，而所用藥齊，亦無由辨知。況文字訛脱，往往有之，則宜乎學者苦其難讀也。蓋二傳久既成絶響，從來醫家，無有詮釋之者。

我明和中，尾藩滕圖南維寅常有見於此，剏有割解之著，辯證頗密，意者其間猶或不免憑臆言之。先君子仍撰匯考一書，專揚搉古義，以匡補之。先兄又更加考訂，有所庚續，俱足以闡發義蘊，嘉惠後學焉。元堅茲刊宋板二傳，附以是書，且不自揣，敢贅管見。而于滕氏書之可取者，亦芟繁存要，以易檢閲，遂釐為上下卷。更使弟子堀川濟，參諸本異同，著為考異，及古書所見紀，與傳相涉者，亦隨見摘錄，以附於後，並鋟之黎棗以行世。夫視死別生，仲景猶且難之，然人不可以自畫，則必也遵仲景之遺意，刻苦勉勵，以至扁倉之地位。雖我輩凡劣，其日夕所期，豈有外於此乎。然則學者于此二傳，苟能講明其文義，而後深求其微旨之所在，因以決病之吉凶，以收其回生肉骨之功，方謂之善讀者矣。嘉永己酉九月既望。江戸丹波元堅茝庭跋

（大略：張仲景以前の文献に、『素問』『霊枢』『難経』の理解の助けになるものは、扁鵲倉公の二つの伝記を特に重視すべきである。二者はともに精妙な医学論理と内容が書かれているものの、古く難解な文献のため、今まで医者たちは巧妙な解釈をしてこなかった。

我が国の明和年間、浅井図南がこのような状況を踏まえて『扁鵲倉公列伝割解』を著し、綿密な考証を行ったが恣意的な解釈も存在する。父が『彙攷』を著し、古いテキストの真意を闡明したく、『割解』の不足を補おうとした。兄がさらにそれを考訂し、二人とも扁鵲倉公伝の研究に大きな貢献をした。宋版の扁鵲倉公伝を刊行する際に、私元堅が敢えて愚見を絮説し、『割解』の一部取るべき内容も増補し、本書の上下巻を編纂した。また弟子の堀川濟を

使って『考異』を著し、附して一緒に刊行した。学者たちはまずこの二伝記の文意を理解してから、二伝記の真意と医術を習得することができるであろう。）

元堅又跋

是書繕錄既竣，就質于友人海保鄉老元備。鄉老具加參訂，且撰續考一卷以見示。其説精覈，多所發明，仍亟錄入之於各款。其或與前説異趣者，亦並存之，以俟識者。鄉老又曰，太史公書，唯扁倉二傳，稱為難讀。蓋其所紀者，在當時不過為醫家恒言，而後世駭異，以為罕所聞焉。加之其文辭簡質，如璞未雕，蓋往往有以當時俗言行之者，而史公懼失其真，故直取其本語以錄之，不復加修飾，譬之猶周誥殷盤，在當時不過告諭臣民，不必設為艱深之辭，唯其文不加潤色，是以後世覺其為佶屈牙耳。此説亦甚有理，仍附著于茲。元堅又跋

（大略：本書の初稿編纂の完成後、稿本について友人の海保元備に意見を伺った。海保がそれを考訂・補充し、さらに『続考』一巻を著した。海保の考証と解釈に精妙な部分があり、取り急ぎ本書に入れた。また観点が違う部分も入れて参考にした。海保によると、扁鵲倉公伝がとても難解で晦渋な理由は、後世に珍しく感じられた内容は、当時の一般的医学常識であり、テキストに修辞がなく素朴なのも、当時の日常生活で普通に使われている言葉を司馬遷がそのまま録したからである。この説がとても有意義なためここに附した。）

刊本には上記元簡による序・後書と元堅による二つの跋文がある。元簡の自序は寛政癸丑（1793）に記され、本書の編纂意図を述べたものである。元簡後書の最後に「文化庚午歳八月重訂」とあって、文化庚午年（1810）に元簡が稿本を校訂したことがわかる。元堅の嘉永己酉年（1849）跋に自らの本書の編纂方法を述べ、兄の元胤が考訂した内容と浅井図南『扁鵲倉公列伝割解』から記載意義のある部分を本書に補充し、さらに考証と注記も補足した。弟子の堀川済に『扁鵲倉公伝攷異並備参』を著させ、『扁鵲倉公伝彙攷』と合わせて刊行した。「元堅又跋」に加えられた跋文は、初稿編纂終了後の稿本を友人である考証学者海保元備（1798～1866）に見せて意見を伺い、さらに海保の校訂によって内容が加えられたことも述べられている。

このように『扁鵲倉公伝彙攷』の編纂は寛政癸丑（1793）の元簡初稿本から嘉永己酉（1849）の刊行まで50年あまりの間に複数回の校訂作業が行われいることから、その成立に関わる複数の稿本も存在するものと考えられる。つまり、本書の刊行までの各段階の稿本の伝存状況の調査及び、諸本の関係を考察すれば、原稿から成本までの編纂過程が明らかになり、元簡・元胤・元堅がどのように考証作業を行い、どのような添削を経て出版に至ったかについても確認できよう。多紀家や医学考証学派の学術的著述の編纂事例を包括的に分析することで、当時の学術がどのように展開していったのか、いかに清朝の最新学説が受容されていったのか等、江戸後期の学術界の軌跡をたどる研究において貴重な資料となるだろう。

二、『扁鵲倉公伝彙攷』の編纂における各自筆稿本

『扁鵲倉公伝彙攷』の自筆稿本の伝存状況に関する調査を行ったところ、以下の自筆稿本が確認できた。

まず、京都大学附属図書館富士川文庫（以下で京大富士川と略す）の調査で、元簡の自筆初稿本と元胤の仮稿本を発見した。

１）元簡初稿本『扁倉伝彙攷』

京大富士川レコードID　RB00005014の資料『扁倉伝彙攷』である。袋綴じの一冊本で不分巻。見返しに「扁倉伝彙攷」「聿修堂蔵版」とあり、内題は「扁倉伝彙攷」である。版心に「躋寿館」と印刷した罫紙を用いている。冒頭に「扁倉伝彙攷小引」とあり、内容は刊本の寛政癸丑元簡自序と一致する。内題の下に「丹波元簡廉夫　学」とあり、朱筆で「学」を「著」と訂正してある。本文と欄外に朱・墨筆による訂正と注記が多く存在する。奥書は刊本の文化庚午元簡後書と一致するが、最後の「文化庚午歳八月重訂簡記」の記載は存在しない。書誌情報と筆跡などを勘案すると、この資料は元簡が寛政癸丑年（1793）に作成した初稿本であると推定できる。

２）元胤仮稿本『史記扁倉伝』

京大富士川レコードID　RB00005010の資料『扁鵲倉公伝』である。袋綴じの一冊本で、外題「史記扁倉伝」とあり、内題「扁鵲倉公列伝第四十五　史記一百五」とあり、挟込紙で「史記扁倉伝　写　多紀柳沂自筆　富士川遊蔵」とある。奥書に「甲戌仲秋借鈔都梁伊憺甫恬所藏元板　迂巣胤記」とあり、元胤が文化甲戌（1814）年に伊沢蘭軒（1777～1829）所蔵の元板史記を借りて抄出したと記されている。倉公伝の原文の部分は筆跡が変っているため、元胤の自筆ではないと考えられるが、扁鵲伝の本文と欄外すべての書き入れ注記は元胤の自筆と見られる。また、後述する元堅稿本と刊本にある元胤補注の部分と照合した結果、この資料は『扁鵲倉公伝彙攷』の編纂に使われた元胤補注の底本と推断できる。これは、元胤が『史記』扁鵲倉公列伝に校勘・考証などの書入れ注記を付けたものだが、元胤は短命であったため、亡くなったあとに元堅が本校註本を『扁鵲倉公伝彙攷』の編纂の参考にしたと考えられる。そのため、この稿本を本書編纂における元胤の仮稿本とする。

本書の成立における元堅稿本は、小曽戸洋の『多紀元堅自筆校訂の「扁鵲倉公伝彙攷」』に紹介及び初稿本の書影が収めされている。本書の元堅校訂初稿本・再校本と『史記』扁鵲倉公列伝の元堅校勘本は、いずれも平成二年（1990）東京古典会に出陳され、小曽戸により落札されたものである[(9)]。現在これら初稿・再校・校勘本は、杏雨書屋の小曽戸文庫に所蔵されていることがわかり[(10)]、杏雨書屋で元堅の諸稿本を調査した。以下、元堅自筆の諸稿本を紹介する。

３）元堅校勘本『扁鵲倉公伝』

杏雨書屋所蔵資料番号小 464 の『扁鵲倉公列伝影宋本（多紀元堅朱筆校本)』である。袋綴じの一冊本で、外題は「扁鵲倉公伝」とあり、内題「扁鵲倉公列伝第四十五 史記一百五」とある。最後に「針澤王氏延喆翻彫宋本影鈔」とあり、この写本は明王延喆翻雕宋本『史記』扁鵲倉公列伝部分の影鈔本であることがわかる。巻首に「庭莅」、巻末に「丹波元堅」「庭莅」と元堅の蔵書印がある。挟込紙で弟子堀川濟の筆による「血如豆比五六枚」に関する考証がある。元堅自筆の朱・墨筆書き入れ注記はすべて欄外にあり、内容はすべて文字異同の校勘となっている。

４）元堅初稿本『扁鵲倉公伝彙攷』

杏雨書屋所蔵資料番号小 465 の『扁鵲倉公伝彙攷（初稿本)』であり、元堅の自筆本である。袋綴じの一冊本で不分巻。外題・内題は「扁鵲倉公伝彙攷」とあり、内題の次に著者情報が「丹波元簡廉夫　著」となっているが、天頭に「男元胤紹翁　補遺」「元堅亦柔　附桉」と追加されている。巻首に「臣元堅印」、巻末「庭莅」と元堅の蔵書印がある。版心に「韋修堂藏版」と印刷した罫紙を用いている。最後に、元簡の奥書で「文化庚午歳秋八月重訂元簡記」とあり、次に「弘化丙午陽月謹錄其副畧校訂數字不肖元堅」と書かれている。これらの奥書から、初稿本は元堅が弘化丙午（1846）年に元簡重訂稿本を抄出し、整理・編纂したものとわかる。

この初稿本には、元堅による補足・書き入れ注記が大量にあり、本書の編纂過程が窺える。「補」の四角囲みに続けて元胤の注、「附」の四角囲みに続けて元堅自身の注が墨・朱筆で記され、さらに朱筆による点線・標記・修正も多くある。注目すべきところは、一冊不分巻である本資料の扁鵲伝の部分の校訂がすべて完全に初稿本に記されているが、倉公伝の部分からは、元堅の「補」「附」の四角囲み標記が欄外もしくは文末に記されるのみで、その「補」「附」の内容はほぼ略されている。これで本書が初稿から完成までの間に、不分巻から二巻となった経緯がわかる。そして、次の小 466 の『扁鵲倉公伝彙攷巻下（再稿本)』が作られることとなったのであろう。

小曽戸洋はこの初稿本を、「毎葉すこぶる綿密な校訂の跡が残されており、元堅らの著述の態度がいかに真摯なものであったかをまざまざと見せつける遺品である」と評価している[11]。

５）再稿本『扁鵲倉公伝彙攷巻下』

杏雨書屋所蔵資料番号小 466 の『扁鵲倉公伝彙攷巻下（再稿本)』である。本資料は、元堅の弟子堀川済が倉公伝部分の校訂を巻下として写し、さらに元堅が校訂を加えたものである。袋綴じの一冊本で不分巻。外題「扁鵲倉公伝彙攷　下」とあり、内題「扁鵲倉公伝彙攷巻下」とあり、内題の次に刊本にある三行の著者情報「丹波元簡廉夫　著」「男元胤紹翁　補」「元堅亦柔　附桉」がある。元堅筆の貼り紙で海保元備による考証がある。最後に、元簡の奥書で「文化庚午歳秋八月重訂簡記」があるが、初稿本にある元堅の奥書や刊本にある元堅跋はない。

内容から、以下の添削が確認できる。

①初稿本倉公伝部分に「補」「附」の四角囲み標記のみで注記のないものに内容を加えた。

②初稿本の内容添削があり、特に文字校勘のみの条文の幾つかを削除した。

③浅井図南の『扁鵲倉公列伝割解』から一部補充した。

④海保元備の考証・校訂が加えられ、貼り紙の部分が本文に書かれた。

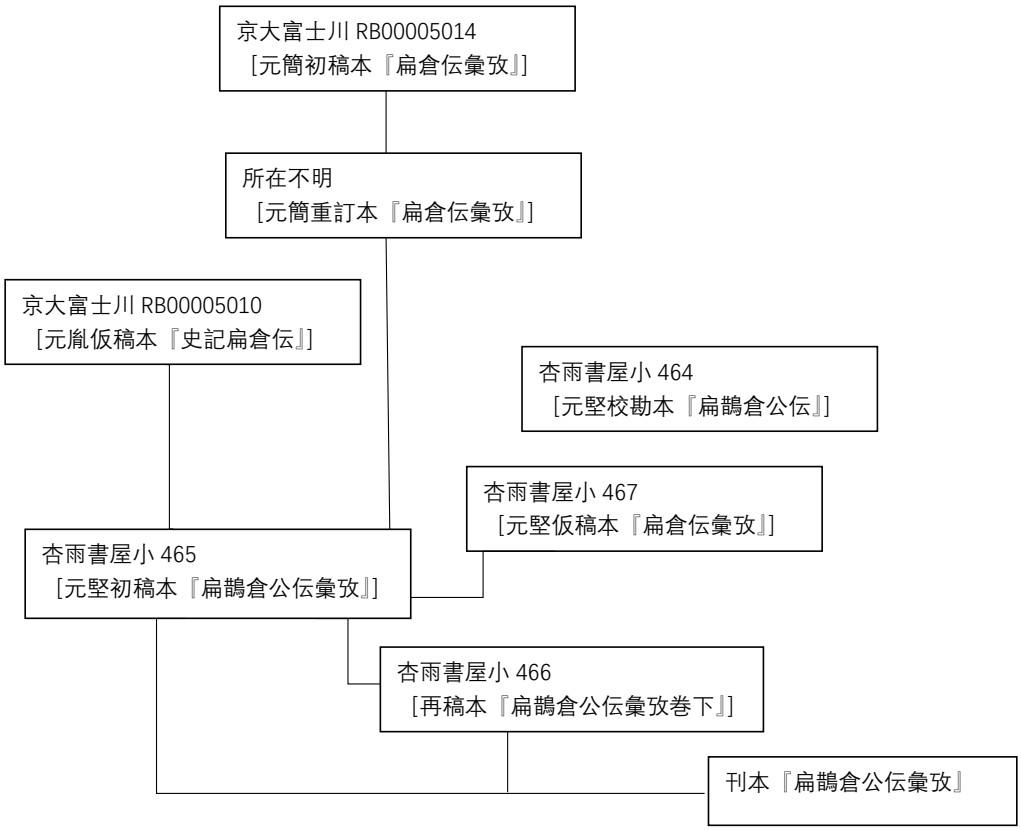
⑤前記小 464 の元堅校勘本にある挟込紙で、弟子堀川濟の筆による「血如豆比五六枚」に関する考証も入れた。

以上の添削から考えられるのは、この再稿本『扁鵲倉公伝彙攷巻下』は、元堅が本書の編纂に当たって、倉公伝の部分をさらに詳細に考証すべく、巻の下を整理・編纂したということである。そして、初稿本を海保元備の意見を伺った後で作られたものだと考えられる。最後の成本は、初稿本とこの再稿本をあわせてまとめられたと想定できる。

6）元堅仮稿本『扁倉伝彙攷』

杏雨書屋所蔵資料番号小 467 の『扁鵲倉公伝彙攷　稿本寫全』である。袋綴じの一冊本で不分巻。外題は「扁鵲倉公伝彙攷　稿本寫全」とあり、内題は「扁倉伝彙攷」とあり、内題の下に「丹波元簡廉夫著」とある。元堅の筆で元簡重訂稿本を写し、自身の訂正・朱筆校勘・考証などを加えたものである。補充した自身の考証は元堅初稿本よりかなり少なく、かつ「附」として示されていないため、この資料は元堅が初稿本を作る前、もしくは父と兄と自身の考証を『扁鵲倉公伝彙攷』としてまとめて編纂する着想を得る前に、父の著『扁倉伝彙攷』を読んで校勘・考証を書き入れた手沢仮稿本と推測できる。注目すべきところは、この仮稿本の倉公伝の「年盡三年～年三十九歳也」の部分に、元堅がすでに乾嘉の代表的考証学者銭大昕の『十駕斎養新録』にある考証を引用し、自らの考えを入れた点である。これは多紀家が元堅の代になって、当時最新の清学を吸収し、乾嘉の学者の考証（特に小学的内容）を自身の所見に積極的に使用した一例として研究価値が高い。このような多紀家の学術と清朝の考証学との関連については、拙稿「従『扁鵲倉公伝彙攷』看医学考証学派的学術与清代考拠学発展的関連」を参照されたい[12]。

このように、『扁鵲倉公伝彙攷』の編纂における各自筆稿本は六つ確認でき、多紀元簡の重訂稿本のみ所在が不明である。これらの稿本を刊本と照合して、元堅初稿・再稿本に添削した内容がすべて刊本に反映され、また稿本にある元堅朱筆の補注は刊本の附に割り注となって記載されている。稿本の間の関係を示す試みとして、本書の編纂経過を以下のようにまとめてみた。［ ］内は、筆者が付けた現存する諸稿本の名称であり、その前に蔵書機関と資料番号を付した。



三、『扁鵲倉公伝彙攷』の伝存する刊・写本について

このように『扁鵲倉公伝彙攷』は編纂され、出版に至った。本書は『史記』扁鵲倉公列伝の研究書として完成度が高く、その刊本と写本は現在でも多く伝存している。その伝存状況について、『国書総目録』に以下のように伝存写本と版本が記載されている。

扁鵲倉公伝彙攷　一冊　【別】扁倉伝彙攷　【類】伝記　【著】多紀元簡　【成】文化七
【写】国会白井・静嘉・東博・京大富士川・東大鸚軒（二部）・東北大狩野・杏雨・楂茅
【版】嘉永二版（二巻）　国会白井・静嘉・東洋岩崎・京大富士川・慶大幸田・早大・東大・東大鸚軒・東北大狩野・葵（扁鵲倉公伝攷異並備参欠、二冊）・杏雨・乾々・茶図成簣・無窮真軒・神習・平沼
＊版本は扁鵲倉公伝・扁鵲倉公伝攷異並備参と合四冊 (13)

『国書総目録』に従って、さらに全日本古典籍総合データベース・Cinii などの検索システムを

利用して、本書の伝存する刊・写本について調査した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、調査に多大な支障をきたし、現時点で確認できていない資料が多数あることが残念である。

1）刊本

本書は多紀元堅の書斎である存誠薬室から、『扁鵲倉公伝』『扁鵲倉公伝彙攷』『扁鵲倉公伝攷異並備参』と合四冊で刊行した。本稿では、『扁鵲倉公伝彙攷』のみ検討するが、同時に刊行された『扁鵲倉公伝』と『扁鵲倉公伝攷異並備参』にある版本情報と元堅による識語を紹介する。まずは『扁鵲倉公伝』が一冊本で、扉もしくは見返しに「嘉永己酉影宋本」「扁鵲倉公伝」「存誠薬室刊」とあり、最後に多紀元堅の嘉永二年九月識語「右史記扁鵲倉公列傳一卷，及太史公自序中一條。從米澤侯後世所藏南宋建安黄善夫刊本影摹開雕以備醫家講習。嘉永二年九月江戸丹波元堅識」が記載されている。

また、すべての刊本の『扁鵲倉公伝攷異並備参』の裏表紙裏に、「嘉永三年庚戌開雕　江都書肆本石町十軒店　萬笈堂英大助」とあり、『扁鵲倉公伝攷異並備参』の刊行が嘉永三年（1850）に完了した可能性を示唆している。

『国書総目録』によると、本書の刊本は国立国会図書館白井文庫・静嘉堂文庫・東洋文庫岩崎文庫・京大富士川・慶応義塾大学幸田文庫・早稲田大学・東京大学（東大鶚軒文庫を含めて）・東北大学狩野文庫・静岡県立中央図書館葵文庫・杏雨書屋・乾々斎文庫（現杏雨書屋）・お茶の水図書館成簀堂文庫（現石川武美記念図書館成簀堂文庫）・無窮会図書館真軒・神習・平沼文庫計13箇所の機関に所蔵されている。さらに、筆者の調査によって、京都大学附属図書館及び人文科学研究所図書室・大阪大学附属図書館・千葉大学附属図書館・九州大学医学図書館・内藤くすり博物館・東京文化財研究所などの機構にも所蔵されていることが判明した。また、王宝平編『中国館藏和刻本漢籍書目』によると、中国では北京大学図書館、上海師範大学図書館、湖北省図書館においても刊本が所蔵されている[14]。

筆者が調査したところ、各刊本本文の内容は一致するが、用紙・装丁などが違ったり、見返しの版本情報が扉にあったりと、数種の刊本が存在している。また、東京大学総合図書館が所蔵している刊本は、『扁鵲倉公伝攷異並備参』の巻末の次に、「醫學舘御藏板」（萬笈堂英平吉）と「江戸本石町十軒店萬笈堂英平吉郎蔵版医書目録」という図書目録が存在し、本書の刊本が初版刊行後、さらに何回かの刊行が行われた可能性がある。

2）写本

本書の写本は、『国書総目録』によると、国立国会図書館白井文庫・静嘉堂文庫・東京国立博物館・京大富士川・東大鶚軒文庫（二部）・東北大学狩野文庫・杏雨書屋・楂茅書屋（現杏雨書屋）計7箇所の機関に9種が存在する。また、筆者の調査によって、研医会図書館・内藤記念くすり博物館などの機構にも本書の写本が所蔵されていることが判明した。以下で確認できた写本を検討する。

①国立国会図書館本

国立国会図書館書誌 ID 000007315916 となり、袋綴じの一冊本で不分巻、もともと白井文庫所蔵。外題は「扁鵲倉公伝彙攷」とあり、内題は「扁倉伝彙攷」とあり、内題の下に「丹波元簡廉夫著」とある。柱に「私淑堂蔵」と印刷した罫紙を用いている。最後に「文化庚午歳秋八月重訂簡記」とあるので、この写本は元簡の重訂本を底本にして写したものと考えられる。

②東大本 A

東京大学総合図書館書誌 ID 100273102、もともと鶚軒文庫所蔵 (15)。袋綴じの一冊本で不分巻、外題「扁鵲倉公伝彙攷　全」とあり、内題「扁倉伝彙攷」とあり、内題の下に「丹波元簡廉夫著」とある。蔵書印「安光」「存誠薬室」「鶚軒文庫」がある。「存誠薬室」は元堅の蔵書印であるため、この写本は元堅と関連する写本と判断できる。

写本の最後に「文化庚午歳秋八月重訂　元簡記」「天保六年乙未之歳秋閏七月」「多紀安節謹寫」「丙申七月二日校正　有命」との朱筆奥書がある。「文化庚午歳秋八月重訂　元簡記」があるので、内容は元簡重訂本の写しと分かる。次にある「天保六年乙未之歳秋閏七月　多紀安節謹寫」と「丙申七月二日校正　有命」、天保六年（1836）に元堅が元簡重訂本を写したことと、天保七年（1837）に有命 (15) が校正したことが分かる。元堅の印はあるが、筆跡を考案すれば元堅の筆には見えないので、別人が写本したものを、自らの蔵書に加えたものと考えられるのではなかろうか。

③東大本 B

東京大学総合図書館書誌 ID 100273103、もともと鶚軒文庫所蔵。袋綴じの一冊本で不分巻、外題「扁倉伝彙攷　単」とあり、内題「扁鵲倉公伝彙攷」とあり、内題の下に「丹波元簡廉夫著」とある。柱に「仁壽堂」とある罫紙を用いている。最後に「文化庚午歳秋八月重訂　元簡記」とあり、この写本も元簡の重訂本を底本にして写したものと考えられる。裏表紙裏に、朱筆の奥書「時嘉永二己酉麥秋日借抄緑筠堂家抄本　樫軒昱」がある。樫軒は幕末の医師西尾良伯の号であり、彼が嘉永二年（1849）に元簡の重訂本を写したものと考えられる。

上記の三つの写本は、どれも元簡の初稿重訂本を底本にして写したものである。これは本書が出版される前に、元簡の稿本が学者・知識人などの間で、書写によって複製され、伝播したことの証左である。

写本の調査で分かったのは、第二節で検討した自筆稿本も含めて、「丹波元簡廉夫」にある「廉」の書き方が異なるほか、本文の異同が多数存在している。これらの異同の比較に基づいて、現存する写本に関するさらなる検討・分類もできると考えられる。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、刊・写本の調査の多くはやむを得ず対象外としたが、今後の課題としたい。

おわりに

本稿では、江戸後期医学考証学派の代表的人物――多紀家の多紀元簡・元胤・元堅三人により編纂された考証学的著述『扁鵲倉公伝彙攷』の諸本について検討した。まず、『扁鵲倉公伝彙攷』の成立を刊本にある序・跋・後書を通して概略した。次に、本書の編纂過程における各自筆稿本を調査・整理し、諸稿本の関係を明らかにし、稿本から刊行までの成立過程を推定した。最後に、本書の刊・写本の伝存状況と伝存本について検討した。これらの考察を通じて、『扁鵲倉公伝彙攷』の諸稿本の関係を究明し、本書成立及び編纂過程を明らかにできた。本考察は『扁鵲倉公伝彙攷』の研究の一助となるであろう。

謝辞

本稿執筆にあたって、元北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部小曽戸洋先生のご好意により、現在の多紀元堅の自筆稿本の所在情報を得た。小曽戸洋先生に深く感謝を申し上げる。また、資料の調査にあたって、杏雨書屋に多大なるご協力を頂いたことに感謝する。

※本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費（19J15164）の助成を受けたものである。

注

（1）　小曽戸洋：『中国医学古典と日本』、塙書房、p661、1996
（2）　小曽戸洋：『日本漢方典籍辞書』、大修館書店、p337、1999
（3）　富士川遊：『日本医学史綱要 2』、平凡社、p7、1974
（4）　小曽戸洋：『日本漢方典籍辞書』、大修館書店、p336、1999
（5）　小曽戸洋：「多紀元堅自筆校訂の『扁鵲倉公伝彙攷』」、漢方の臨床、42(11)、p1306–1308、1995
（6）　宮川浩也：「『史記会注考証』と『扁鵲倉公伝彙攷』の関係」、日本医史学雑誌、第 46 巻第 3 号、p382–383、2000
（7）　宮川浩也：「『扁鵲倉公列伝割解』の研究　現伝本における書き入れおよび旧蔵者」、日本医史学雑誌、第 46 巻第 4 号、p565–586、2000
（8）　楊海峥：「日本『史記』研究論稿」、中華書局、2017
（9）　小曽戸洋：「多紀元堅自筆校訂の『扁鵲倉公伝彙攷』」、漢方の臨床、42(11)、p1306–1308、1995
（10）　小曽戸洋：「杏雨書屋のコレクション」、日本医史学雑誌、第 61 巻第 1 号、p11、2015
（11）　小曽戸洋：「多紀元堅自筆校訂の『扁鵲倉公伝彙攷』」、漢方の臨床、42(11)、p1306–1308、1995
（12）　成高雅：「従『扁鵲倉公伝彙攷』看医学考証学派的学術与清代考拠学発展的関連」、『中医典籍与文化』、社会科学文献出版社、2021 年第二輯、2022 年出版予定
（13）　国書研究室編：『国書総目録』第 7 巻、岩波書店、p226、1989～1991
（14）　王宝平編：『中国館藏和刻本漢籍書目』、杭州大学出版社、p146、1995

(15)　鶚軒文庫は東京大学教授土肥慶蔵（1866～1931）の旧蔵書である。

(16)　膳所藩藩士の高橋作也（1825～1865、号は有命）によるものであろうか。